

◆著作奨励賞

著者：鍋倉咲希

書名：『止まり木としてのゲストハウス：モビリティと時限的つながりの社会学』

出版社：晃洋書房

出版年月：2024 年 2 月

立教大学大学院観光学研究科に提出した筆者の博士論文をもとに刊行された本書は、序章、本論 5 章、終章の 7 章立てで構成されていて、このうちの序章・第 1 章・第 5 章・終章の 4 章が書き下ろしである。『観光学評論』などが初出の残り 3 章も、初出論文から加筆や修正が加えられていて、読みやすくなり読みごたえも増している。本書が論じるのは、「鳥などの動物がふと立ち寄っては離れていく「止まり木」のようなゲストハウス」という時空間において、観光者が「居合わせる」ことから生じる時限的つながりの諸相とその意味である。カンボジア・ベトナム・ラオス・タイに立地する日本人向けゲストハウスに研究対象を絞り込み、2018 年から 2023 年にかけて筆者が宿泊、あるいはスタッフとして働くなかで、自らも観光者として旅をしながら、ゲストハウスのなかでの他の観光者らの行動を参与観察して得たデータから、本書の分析は行われている。

本書でまず評価できるのは、「居合わせる」ことから始まる時限的つながりを分析する視角や意義を、移民・移住研究、バックパッカー研究、アーリ以降のモビリティ研究などの潮流を広く把握して、社会学や文化人類学における共同性研究のなかでしっかりと位置付けたことにある。先行研究を渉猟して読み込む過程において、筆者の研究者としての基礎が養われ、参与観察で体得したデータを解釈する視野も広がり、フィールドへ臨む姿勢も変容したであろうことは容易に推察できる。

特に興味深かったのは、やはり参与観察に基づき書かれた第 3 章・第 4 章・第 5 章の具体的な分析であろう。第 3 章では、パフォーマンス理論の視点から、ゲストハウスにおける観光者のつながりの諸相を、ゲストハウスを舞台、宿泊客をパフォーマーと捉え、事例を挙げながらその舞台装置と演出を読み解いている。第 4 章では、ゲストハウスという時空間での時限的つながりが、「つながり」あるいは「とぎれ」、様々な「まとまり」が生まれては消えてゆく社会的意味が分析されている。書き下ろしの第 5 章では、止まり木のようなゲストハウスに「ただ、いる、だけ」の「何もしない」観光者の存在を、ゲストハウスに他者と「いる」という共在感覚や、何もしない「無為」を「する」社会への抵抗、という観点から読み解いている。若い学生や研究者にとって、ゲストハウスは身近な存在であり、注目もされているであろうが、そうしたゲストハウスでの緻密な参与観察をこうした本格的な研究につなげた、という点からも、本書は高く評価されよう。

総じて、他分野にわたる学術的な潮流を堅実かつ的確に踏まえて、参与観察に基づきゲストハウスで生起する観光者の時限的つながりの諸相を読み解いた本書は、観光学研究のすそ野を広げ発展させる力作であり、本学会の著作奨励賞の授与にふさわしい作品である、と評

価できる。本書から筆者の有する実力と可能性は明らかであり、今後は、ゲストハウスそのものの立地が観光者の時限的つながりに与える影響や、日本人向けゲストハウスの特性を相対化する試みなど、新たな研究領域への展開が大いに期待される。